

示唆されているが、自験例では腎からの塩喪失は認めなかった。Anand等は、腎外性の水分とNaの喪失により、二次的にアルドステロン不応状態となり高K血症が生じる機序を報告しており、自験例もこの機序で説明が可能である。また、電解質補正後でもアルドステロンの分泌亢進を認め、電解質異常を代償している時期があると考えられる。よって、アルドステロンは重症電解質異常への進展予測に利用可能と推測される。

6 糖尿病における血管内皮細胞障害の検討

谷 長行

県立がんセンター新潟病院内科

トロンボモジュリン (TM) は血管内皮細胞に発現するトロンビン受容体で、血管内皮細胞障害で血中濃度が上昇する。糖尿病患者における血中TM (sTM) 測定の意義を解説する。

- (1) DM患者の約半数でsTMが正常上限値 (Mean + 2SD) を超えている。
- (2) 合併症進行例でsTM高値例が多い。
- (3) 細小血管症の無い患者でもHbA1c (JDS) 6.0%以上でsTM高値例が見られる。
- (4) 短期的な血糖改善ではsTMは低下せず、年単位の改善でようやく低下する。
- (5) sTM高値例では冠血管障害の頻度が多く、マーカーとなり得る。
- (6) sTM正常例では5年間の観察期間も安定した推移を示し、特に血糖良好例は正常範囲に留まった。一方、sTM高値例では変動幅が大きく、血糖改善例でのみsTM正常化例が見られた。
- (7) 血流改善や血小板機能亢進を是正する薬剤の効果を検討した。結果、アスピリン、シロスタゾール、EPAの4週間投与でsTMの低下が見られた。
- (8) ARIの12週投与ではsTMは変化しなかった。
- (9) スタチン投与でもsTMは低下が見られた。

7 糖尿病患者における冠動脈CT所見について

星山 彩子・星山 真理

柏崎中央病院内科

糖尿病患者で冠動脈CTを撮影した症例について、その所見、有用性や、治療のアウトカムなどについて検討した。

【対象】2013年1月～9月の間に、外来にて冠動脈CTを撮影した、冠動脈疾患既往のない2型糖尿病患者30症例。

【結果】CT上有意狭窄を認めた症例は16例 (53%) であった。石灰化病変は19例 (63%) に見られた。

冠動脈CT上有意狭窄を認めた16例のうち、11例がCAG施行され、うち4例にPCIが必要であった。CT上所見があつてCAGで有意所見を認めなかった7症例について検討すると、石灰化が強い、画像不良、冠動脈低形成などの要素があつた。

【考察】今回の対象患者では、冠CT上高率に有意所見を認めたが、実際にPCIまで進んだ症例は少数で、冠CTとCAG所見に乖離を認めるものも多かった。特に石灰化病変はCT-CAGの乖離の原因であった。どのような糖尿病患者に冠CTを適応とすべきかは、今後症例の蓄積が必要である。

8 Propranolol投与にて心不全を来したBasedow病の1例

鈴木 達郎・植村 靖之・鈴木亜希子
北澤 勝・鈴木 浩史・皆川 真一
山田 貴穂・羽入 修・曾根 博仁

新潟大学医歯学総合病院内分泌・代謝内科

症例は45歳、男性。4年前から健診で不整脈を指摘、3年前から動悸を自覚していた。X年6月頃から動悸の増悪などを認め近医受診。TSH : 0.01 μ IU/ml, FT3 : 9.53pg/ml, FT4 : 4.14ng/dl, TSHAb : 40.9%とBasedow病を認め当院受診。初診時HR120回/分程度の頻脈性心房細動を認